

『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』の エフィーモフについて

田 中 継 根

ドストエフスキの『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』は、第一章から第三章までが主として主人公ネートチカの継父エフィーモフの生涯の描写に当てられているが、そのエフィーモフを論ずる際、必ずと言ってよいほど、他の作家の作中人物との親近性（バルザック、ホフマン、ゴーゴリ等がしばしば引き合いに出される）や作者の自伝性が指摘される。ここでは、その自伝性に焦点をあて、作者がそれに付与した意図を探ってみたい。

地方の音楽家の息子として生まれたエフィーモフは、ある地主の個人オーケストラで下手なクラリネットを吹いているが、あるイタリア人にヴァイオリンを教わって以来、自分を天才的なヴァイオリニスト、天才的な音楽家と信じるようになる。天狗になった彼は雇い主と喧嘩し、首都で名を上げるべく村を飛び出すが、だらし無い性格のため間もなく金を使い果たし、生活のためやむなく地方まわりの二流のオーケストラに加わってあちこちを転々としたあげく、七年後ようやく首都に足を踏み入れる。そこでドイツ人の若い音楽家Bと知り合う。Bはエフィーモフを未来の天才音楽家として尊敬するが、間もなくその正体を見抜いてしまう。すなわちエフィーモフの才能は初めこそ本ものであったが、未来の栄光を夢見て自分を満足させるだけで、基本的修練を怠って来たために、今やその才能は失われてしまっていること、そして自分の破滅の意識と、それを認めまいとする意識とが彼の内部で絶えず猛烈な戦いをくりひろげていること、である。Bはエフィーモフを慰め、勇気づけ、忍耐力を持つよう説得して彼のもとを去る。数年後、すっかり落ちぶれ乞食同然の身なりをしたエフィーモフに街で偶然に出会ったBは、昔よしみから彼をあるオーケストラに世話をしやる。初めのうちこそ真面目に勤めを果すエフィーモフだが、間もなくその傲慢な、自惚れに満ちた態度でまわりの誰彼をこきおろし、自分は音楽の天才だが、世に認められないのは性悪な妻のせいであるとふれまわる。やがて、そのような彼の中傷や自惚れを面白がっていた連中からも見棄てられる。家の家庭——彼と妻とその連れ子ネートチカ——は以前から地獄と化している。妻には口汚く罵り、娘に対しては、自分は天才ヴァイオリニストであるが、世に認められないのは妻に邪魔されているからである、妻さえ死ねばすべては順調に進むはずだ、と吹きこむ。幼いネートチカはそれを真に受け、母の死後に訪れるはずのバラ色の未来を信ずる。父を熱狂的に愛し、崇拜し、父のためには盗みさえはたらく。やがて外国の高名なヴァイオリニストがペテルブルグを訪れ、その演奏に接するにおよんで、さしものエフィーモフも真実を認めざるを得なくなる。妻を死なせ、娘を破滅させたエフィーモフだが、夢が最終的に破れた今、ついに発狂する。

エフィーモフの悲劇は、社会的条件によるものではないし、運命に見はなされた人生ということでもない。生まれは貧しくとも、ともかく解放された農奴であり、自分の運命を自分で切り開く可能性が与えられている。オーケストラの所有者は有徳の人物であり、エフィーモフを一人前の音楽家として遇する。Bという誠実な友人に恵まれ、職の斡旋まで受ける。夫から虐待されながらも一縷の望みを夫にかけて必死で家族を養う献身的な妻がいる。彼が立派な音楽家になることを妨げるような外的要因はまったく無い。彼の悲劇は専ら彼自身に由来する悲劇である。

Bの言葉によれば、エフィーモフには初めは確かに才能があった。首都で墮落してからも、音

楽に対するセンスと批評力は抜群であったが、それ以前には、音楽の創造の点でも光るものを持っていたのである。だが、自分の力を過信し名声を求めただけで修練を怠った彼は、間もなく自分の才能を葬ってしまう。自身卓越した批評家であるだけにそれに気づかないわけにはいかないが、その恐ろしい真実を直視する勇気を持たず、絶望的な自己欺瞞を始める。「性悪な」妻や貧乏は、他人の眼のみならず自分をも欺んがための口実——世に認められないことへと口実——に過ぎない。その欺瞞を完璧なものにするために幼いネートチカを巻添にする。才能に対する疑惑が頭をもたげるのを押えこむため、「天才ヴァイオリニスト」はヴァイオリンを手にはせず、つき合う仲間も、自分より程度の低い人間に限られる。これらすべて、現実を直視するのを避けるための絶望的なあがきに他ならない。最後の手段が酒である。そのような自己欺瞞を最終的に崩壊させるのが本物のヴァイオリニストの演奏であり、ここに到ってはエフィーモフを待ち受けるのは狂気と死のみである。語り手であり、作品の主人公でもあるネートチカは次のように書く。

彼は死んだが、それというのもこのような死が彼の全生涯の当然の、自然の結果だからである。それまで彼を支えていた一切のものが、幻のように、実体の無い空しい夢のように一挙に崩壊し飛び散ってしまったとき、彼はこのように死ぬほかなかったのである。最後の希望が消え失せたとき、生涯にわたって自分を欺く手段としたもの、自分を支えていたものが、一瞬にして彼自身の前で解決を見、明確な意識となったとき、彼は死んだのである。¹⁾

ドストエフスキイの全作品の中でも、読者にこれほどまでにやりきれない思いをさせる人物は稀である。それでもまったく否定的にのみ描かれているわけではなく、肯定的な面が顔を見せることがある。例えば、ネートチカに読み書きを教えたり、御伽噺を聞かせてやったりする。娘が笑うのを見て「父は楽しそうだった」（P. 165）とネートチカは語る。あるいは、娘に、「ママをかわいそうに思わなければいけない。ママは体の具合がとても悪くかわいそうなんだ。ママは皆のために一人で働いてくれているんだ」（P. 171）と語ったりする。自分の音楽的才能に関しても稀には素直になることがある。Bとの別れに際して次のように弱気になる。

エフィーモフは声をあげて泣きながら、俺は破滅した人間だ、この上なく不幸な人間だ、俺はこのことがずっと前からわかっていたけれど、今になってようやく自分の破滅をはっきり見きわめた、と語った。

「俺には才能が無いのだ！」と、死人のように青ざめて彼は言葉を結んだ。（P. 151）

しかし、この素直な気持（もっとも、自分を悲劇の主人公に仕立てあげて相手の同情を引こうとするさもしい根性も見えてはいるが）も束の間で、間もなく自己過信と傲慢とに取って替られる。自分の運命ぐらい自分で切り開いてみせる、すぐにでも名声と金を一挙に手に入れてみせると豪語して、Bに肩をすくめさせるのである。ネートチカに対して時として現れる父親らしい顔も、キャンデーを餌に家の金を彼女に盗ませようとするような所業の前ではすっかり色褪せてしまう。寛大な地主に恥ずべき中傷をするエフィーモフ、自分は何もせずBの金で生活していながら、そのBが生活のために不本意な仕事をするのを見て芸術への冒瀆呼ばわりするエフィーモフ金が目当てで結婚しながら、その妻の死を公然と待ち望むエフィーモフ…… 作者はこれでもかこれでもかとはばかり読者の前にエフィーモフの醜い姿を晒し出す。人間の持つ醜さと弱さを集

約したような人物としてエフィーモフは描かれているのである。次の場面は、彼の人間性を適格に示す非常に秀れたものの一つである。

ある大きな祝日の朝、Bは旧友のエフィーモフがお祝いに来たと取り次がれた。玄関に出てみると、エフィーモフは酔っぱらっており、頭を足につけんばかりに低く御辞儀し始めた。口の中でぶつぶつ言うだけで、どうしても中に入ろうとはしない。彼の振舞の意味は、私らのような才能の無い人間がどうしてあなたのような有名な方とおつき合いできるでしょうか、私らのようなちっぽけな人間が祝日のお祝いを言うのには下男部屋で充分です。お祝いを申しあげたらすぐに引きあげます、ということだった。(P. 158)

すでに名を成したBに対する羨望とむき出しの敵意が見え、卑屈と隣りあった傲慢さが現れている。

こうまで否定的に描かれたエフィーモフについて作者の自伝性を云々するのは、一見乱暴なことのように思われる。だが自伝性を指摘できる根拠が幾つかある。先ず、兄ミハイルに宛てた手紙に見られる「間もなく兄さんはネートチカ・ネズヴァーノヴァをお読みになるでしょう。これはゴリャートキン²⁾のような告白です。もっとも調子も種類も違いますが」という言葉である。『分身』が一人称小説でない以上、ここにいる「告白」とは、作品の形式でなく内容を指したもののはずである。従って『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』が告白であるのは、少なくともここでは、主人公の自伝という形式を指しているのではない。しかし、このことだけから、エフィーモフの形象に含まれる作者の自伝性を導き出すことは勿論不可能で、事実、ネートチカに作者の分身を見出すことも可能であろう。だが、Bが別れに際したエフィーモフに贈ったはなむけの言葉は、はっきりとこのエフィーモフという人物の持った作者の自伝性を語っている。Bは、エフィーモフが音楽家として大成するための様々の忠告を与えているのである。例えば、「羨望や、下らない卑劣な感情や、それに何よりも、愚劣きわまることが、貧乏よりも激しく君を襲うことだろう」(P. 152)と語る。エフィーモフの才能が空しく失われてしまったこと、もはや彼には音楽家としての未来が無いことをよく承知しているBが、何故こんな不必要な忠告をするのか。見方によっては作品の矛盾、弱点とも取れるBのこの言葉は、明らかに作者ドストエフスキイが自らに向けた忠告であり自戒であると解釈すべきであろう。勿論、Bの言葉が作品全体から浮き上がっているということから、逆にエフィーモフと作者とが全く無関係であるとの結論を導き出すことも不可能ではないかも知れない。極論すれば、作者がここで作品とは無関係な自戒の言葉を挿入した、という解釈である。しかし手紙等から明らかになる、当時のドストエフスキイの人間性、精神状態は、エフィーモフと作者の親近性をかなり明白に語ってくれるのである。

ところで兄さん、僕の名声は今絶頂に達したように思われます。いたるところ、信じ難いほどの尊敬と恐るべき好気心が僕を取り巻いているのです。(ミハイル宛て、1845、11、26、P. 84)

兄さん、僕は上流社会に乗り出しました。(ミハイル宛て、1846、2、1、P. 86)

兄さんと別れてから3000ルーブルも使ってしまいました。僕の生活ぶりは乱脈で、まったく困ったことです。(同上、P. 87)

僕には恐ろしい欠点があります。限りない自尊心と功名心です。(ミハイル宛て、1846、4、1、P. 89)

若いドストエフスキイが自分の性格を全般的にどのように捉えていたかはともかくとして、少なくとも金使いの荒さ、恐るべき自尊心、功名心を自分の欠点として捉えていたことが以上の手紙に書かれている。エフィーモフも同じ性格が与えられている。村を出るに際して雇い主からもらった銭別をまたたく間に使い果たすし、Bの世話で職を得ても給料はすべて仲間達との飲み食いに使ってしまう。そして自尊心、名誉心についてはいうまでもない。

精神状態についてはどうか。Д.В.グリゴロヴィチは、『文学的回想』の中で次のように語っている。

『貧しき人々』の著者をほとんど天才のように持ち上げ、誉めちぎったあげくに、その文学的才能をくそみに貶すという思いがけない変化には、ドストエフスキイほど感じやすく、自尊心の強い人間でなくても大いに傷ついたことであろう。彼はベリンスキイの仲間を避けるようになり、以前よりもさらに自分の中に閉じこもって、異常なほど怒りっぽくなった。³⁾

エフィーモフが意識の片隅に持っていた、自分の才能に対する疑惑、あるいは絶望は、まさに作者のものだったであろうと容易に推察される。ミハイル宛ての手紙でも、処女作の成功の頃に書かれたものからは、文壇に熱狂的に迎えられて有頂点になっている様子がよく窺えるが、第二作の不評の頃からあとに書かれたものには、そのような幸せなドストエフスキイは影をひそめ、暗い調子のも、悩みを訴えるもの、いら立った調子のもが非常に目につく。自分は結局凡庸な作家で終るのではないかという、彼の念頭を去らなかつたであろう不安が、その原因の一つであつたらうと想像される。逮捕のあと、ペトロパヴロフスク要塞で書かれた手紙には、過去の自分の生活への次のような反省が見られる。

過去を振り返ってみると、こんなことを思わざるを得ません。すなわち、いかに時間が空しく浪費されたか、時間がいかに迷いと誤りと怠惰と生活の無能の中に消え去ったか、自分がいかに時間を大切にしなかつたか、何度自分は自分の心と精神に対して罪を犯したか、です。こんなことを考えると心が引きさかれる思いです。(P. 130～131)

ここに言われている「過去」が自分のそれまでの全人生を指すのかどうかは明らかではない。だが、『貧しき人々』以後の時期がそこに含まれているのは疑い得ないであろう。自分の才能への疑惑に苦しめられたドフトエフスキイが、『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』の執筆にあたって、詳細に自分を検討し、厳しく自己を批判したのは確かであろう。А.Я.パナーエヴァの回想に書かれている次のようなドストエフスキイ批判は、そのままドストエフスキイの自己批判だったのではないだろうか。

まだ若く神経質だった彼は、自分を抑えきれず、作家としての自尊心と自分の文学的才能に対する自信を露骨に出していた。(中略)彼は自分の才能は誰よりも上であるという思いあがった態度をしていた。(中略)ドストエフスキイが自分を天才と思いこんでいるという噂を耳にすると、ベリンスキイは肩をすくめて悲しそうに言った。「情ない話だ。ドストエフスキイには確かに才能があるが、それを磨こうともせず、すでに自分を天才と思っているようでは進歩は無いね」

異常な自尊心、功名心、処女作の成功による自惚れ、金使いの荒さ、怠惰……これらは緊密にからみあっているのではないか、そして第二作以降の作品の不評を拓いた原因ではないのか。こんな思いが、エフィーモフの形象を創り上げるのに一役買ったのであろう。

他方、ドストエフスキイが、自分の作品の不評の原因を自分自身にのみ求めていたのではないこともまた確かである。

僕は今一所懸命書いています。僕はいつも、文学界全体、雑誌、批評家達と訴訟をおこしたような気分なのです。(ミハイル宛て、1846, 12, 17, P. 104)

僕の予想が正しければ、この長編は今年の値打ちものとなるでしょう。僕を葬ってしまおうと躍起になっている「現代人」の連中の鼻を明かしてやることになるでしょう。(ミハイル宛て、1847, 4, P. 109)

これを、すでに引用したBの言葉(「羨望や、下らない卑劣な感情や、それに何よりも愚劣きわまることが、貧乏よりも激しく君を襲うことだろう」と並べてみれば、ドストエフスキイの意図は明らかである。作家を滅ぼす、そのような外的要因をBに語らせているのである。

内的要因を与えられているのがエフィーモフであるが、彼は、言わばそれを与えられ過ぎており、それだけで、つまり外的要因なしで破滅する。すなわち作者は、自分の作家活動を危うくするような内的要因を凝縮した形でエフィーモフに与えているということである。エフィーモフを評して、Bは、「彼は夢想家で、自分が突然、何かの奇蹟で、いきなり世界で最も有名な人間になれるなどと考えているのです」(P. 175)と語るが、この「夢想家」という評は、エフィーモフの本質をうまく捉えていると言ってよいだろう。ドストエフスキイは、フェリエトン『ペテルブルグ年代記』で夢想家の定義づけをして以来、『白夜』、『女あるじ』、『弱い心』などで夢想家の主人公を登場させているが、それらの人物達はそれぞれに、いろいろな点で『年代記』の夢想家像からずれるものを持っており、一様に論ずることは不可能である。基本的な共通点として、彼らは皆、自分と社会、他者との間に安定した、あるいは平和的な、また微温湯的な関係を持つことができず、意識の中に何らかの傷を秘めているのだが、それ以上に具体的なこととなると、共通の特徴を指摘することは困難で、それぞれの顔を見せている。エフィーモフもその夢想家列伝の中の一人であり、自分だけの顔を持つ夢想家なのだが、『年代記』で指摘された夢想家の罪が最もよくあてはまるのが彼である。すなわち、現実感覚の喪失であり、道徳感覚の喪失である。

作者は何故に内的要因を凝縮された形でエフィーモフに与え、醜さと弱さのシンボルのような人物にしたのか。これに対する第一の答は、勿論、作者は自伝を書いたのではないということ

ある。だが、作品に含まれる自伝性という点から見るならば、先ず作者の自己批判の厳しさが考えられるだろう。しかしより可能性の高いものとして、作者には、自分の持つ問題点を凝縮した形で作中人物に与えることで自分自身を浄化し、それから解放されようとする一種の文学的カタルシスの意図があったのではないか、という推察が成り立つのではないだろうか。そして、エフィーモフの死は、ドストエフスキイの悪しき分身の死という象徴的意味を持たされていたと考えるのは、必ずしも勝手な解釈ではないと考えられる。

いずれにせよ、ドストエフスキイは、自分の才能を疑わざるを得ないという苦しみの中にあって、以後の作家活動を脅す内的要因、外的要因を検討し、批判すべきものは批判しまた自分を勇気づけ、自信を回復しようとした。次に引用するエフィーモフへのBのはなむけの言葉は、そのような意味でまさに作者が自分自身に向けた言葉として聞くことができる。

君の未来の友人達は、君を慰めたり、君の中の秀れたもの、真実のものを君に示したりするどころか、邪悪な喜びをもって君の失敗の一つ一つを数えあげ、君の欠点や誤りを指摘するばかりだろう。そして冷静と軽蔑を装いながら、実はまるで祭日を祝うように君の失敗を祝うだろう（まるで誤りを犯さない人間がいるかのように）。(中略)君はまだそんなに貧しいというわけではない。君は生きて行ける。雑用を軽蔑してはいけないし、嫌な仕事もしなくてはいけない。僕が貧しい職人達の集まりで演奏したように。だが君には辛抱が足りない、それが君の病気だ。(中略)君は自惚れ屋のくせに意気地が無い。勇気を出し、時機を待ち、勉強することだ。そしてもし自分の力に期待が持てないのなら、僥倖をあてにして進むのだ。君には情熱があり、感受性もある。多分目標に到達することができるだろう。だがもしそうでないとしても、それでもやはり僥倖をあてにして進んで行きたまえ。だってどっちみち失うものは何もないのだし、うまく行けば儲けものなのだから。ねえ君、僥倖をあてにするというのは大したことなんだよ。(P. 152)

『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』という作品の中でエフィーモフが持つ意味は、勿論別の検討を要する大きな問題である。しかし、エフィーモフに焦点を当てて考察するならば、この人物に作者の自伝性が与えられていること、また作者の、気弱な自分を激励し、これをきっかけとして以後の文学活動を揺ぎないものにしようという意図が、この作品を生んだもののひとつとして確かに存在したことは十分に指摘できると思われるのである。

- (注) (1) Ф.М. Достоевский, Пол. собр. соч. в 30 томах, т.2, Л., 1972, стр.188. 以下、作品からの引用は本文中にページ数のみを示す。
(2) Ф.М. Достоевский, Письма, 1, М., 1928, стр.108. 日付は1847年1月～2月。以下手紙からの引用はページ数と日付のみを本文中に示す。
(3) Ф.М. Достоевский в воспоминаниях современников, т.1, М., 1964, стр. 134-135.
(4) Там же, стр. 140-142.